2011年度　　E

国　語

注　意

1. 問題は全部で11ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その2)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. **HB**の黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の ◯ を塗りつぶしなさい。○で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答がイのとき)

1	● ㋺ ㋩ ㋥ ㋭ ㋬ ㋣

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

静穏とか静謐とかいうものは、ある時代までは、［　A　］のように「そこにあるのが当たり前」なものだったろう。原初のころ、森のなかを歩くときの静けさは、人びとの暮らしのなかにもとけこんでいたはずだ。人びとの大声は何百メートル先にいる人の耳に届いたことだろうし、人びとは鳥の声の意味するところを微細にわたって聞き分けていたことだろう。山にも野にも沢にも、住居の内外にも、そこには車が吐きだす騒音もなく、冷蔵庫や冷暖房器が送りだす音もなかった。縄文のころはもちろん、江戸のころも、いや明治のころだって、人びとの日常の暮らしには、深い静けさがあったように思う。

後世に残る作品［　B　］を明治の三十年代に書いた国木田独歩は、林のなかにいて「自然の静粛」を味わっていた。当時の渋谷村（渋谷区）の風景である。独歩は書く。

「午後林を訪ふ。林の奥に座して(1)四顧し、傾聴し、睇視し、黙想す」

「天晴れ、風清く、露冷やかなり。(2)満目黄葉の中緑樹を雑ゆ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。独り歩み黙思口吟し、足にまかせて近郊をめぐる」

「林に入り黙座す。犬眠る。水流林より出でて林に入る、落葉を浮べて流る。をりをり時雨しめやかに林を過ぎて落葉の上をわたりゆく音静かなり」

楢の木々が黄葉し、落葉する姿を独歩は追う。時雨がささやき、凩が叫ぶ。一［　C　］の風が小高い丘を襲えば、幾千万の木の葉が高く大空に舞い、小鳥の群れのように遠く飛び去る。武蔵野の林は、さまざまな音を奏で、音は次第に近づき、次第に遠ざかり、ときには止む。

「頭上の木の葉風なきに落ちて微かな音をし、それも止んだ時、自然の静粛を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覚ゆるであろう」

独歩はまた「暫く座て散歩の疲を休めて見よ」とも書いている。これは、ぼんやりの勧めでもあるだろう。さあ、しばらくは歩くのを止めて林のなかで立ち止まろう。立ち止まるだけではなく、ときには坐ってみたらどうだろう。坐り、ぼんやりとしたまま鳥の声、風の声に耳を傾けてみたらどうだろう。そんな独歩の声が聞こえてくる。

静けさは「ぼんやりの時間」の質を深めてくれる。独歩の言葉を借りれば、ぼんやりとは黙思、黙想である。かつての武蔵野の静けさは、黙思、黙想の質を深めてくれた。想像にすぎないが、独歩は、散歩の途中、草の上に坐りこんで、ぼんやりしたひとときを送ったことだろう。幾千万の木の葉が空に舞う姿をながめ、その恐ろしく［　D　］な情景のなかに、自然界の静けさを味わうぜいたくな時間を過ごしたことだろう。人に会うことは滅多にない。道は落ち葉に埋もれて、一足ごとにがさがさという音がする。ときに山鳩があわただしく飛び去る音がする。かつての武蔵野には、人の心を落ちつかせる静けさがあった。

庭に藪茗荷（やぶみょうが）の白い花が咲きだすと、*らんだ庵はもう秋の気配だ。

夕方の六時を過ぎている。蜩（ひぐらし）は相変わらずにぎやかな祭り囃子をつづけているが、あたりの暗さが増してくるにつれて、そのにぎやかさがやや衰えてくる。丘陵の影の部分が濃くなりはじめたころ、遠くの森で一匹の蜩が鳴きはじめた。ほそぼそと鳴く。雌にめぐりあえなかった無念さをにじませて鳴く、と思うのは人間の勝手な(3)カンショウだろう。やや離れたところからまた、かなかなと鳴く声が聞こえてくる。晩鐘にふさわしい静かな声だ。

その夜は早く寝た。蛾が障子にあたり、そのたびに大きな音をたてている。ガチャガチャも部屋にまぎれこんで鳴いている。虻（あぶ）が電灯のまわりを回っている。ガチャガチャも虻もはやく外に出してやらなければという仏心がないでもなかったが、電灯を消して寝入った。

翌朝、早く目覚めた。

ガラス戸の外はまだ暗かった。暗いけれども、どこかに光をおびている暗さだ。柱時計は四時半を示している。そのとき、一匹の蜩が鳴きはじめた。いや、少し前から鳴きはじめていて、その声で目覚めたのかもしれない。目覚めた私には、なんの前ぶれもない、突然の独唱のように聞こえたのかもしれぬ。その声には孤高をたのしむおもむきがあり、森の霊気のケシン(a)にさえ思えた。むろん蟬（せみ）は無心に鳴いているだけで、孤高とか霊気のケシンとかいっているのは、例によって人間の勝手な思い入れだ。蜩の声は、あたりに響きわたっているのに、その声は少しもうるさくはなく、むしろ夜明け前の森の静けさをきわだたせている。

(4)静寂とは、無音の状態をいうのではない、ということをあらためて感じた。

大自然が発する多様な音、生きものが発する多彩な音と声はたえず、静けさにささえられている。夜明け前の蜩の声は、大自然の営みの根底にある静けさというものを、教えてくれた。

蟬の声が鳴り響くとき、芭蕉はそこに閑(しずか)さを感じた。岩にしみ入る、というほどの蟬の声はかなりの激しさを含んだものであったろう。その激しさを受け止めながら、芭蕉は「閑さ」を感じとっていた。

閑さや岩にしみ入る蟬の声

蕪村は蕪村で、時雨が楠の根を濡らしてゆく情景に静けさを感じていた。時雨が楠の根を濡らす微かな、実に微かな音を聴き、その音があたりの静けさをきわだたせている、と感じたのだろう。

楠の根を静かにぬらすしぐれ哉

独歩もまた、時雨が落ち葉のうえをわたってゆく音に静かさを感じていた。

私たちの(b)先達は、蟬の声、鳥の声、せせらぎの音、時雨の音などに、静けさを感じとる「聴く文化」をもっていた。自然の音は、静けさの妨げにならないばかりか、静けさをささえ、静けさをきわだたせる音楽だ。質のいいぼんやりの時間をたのしむには、静けさが必要だ。それも、飛び切り自然度のゆたかな場所で、静けさを聴きたい。

戦後、激変したことの一つは、私たちが周辺の静けさといったものの多くを失い、貴重な「聴く文化」を失いつつあることだろう。(5)芭蕉や蕪村の残してくれた句の心を受け継ぎ、ゆたかな「聴く文化」と共に生きてきた日本人の多くがなぜ、無神経に自然を壊し、山に車の騒音を響かせ、人びとから静謐を奪ってゆくのか。(6)そのことの恐ろしさに気づかぬことの恐ろしさを思う。

（辰濃和男『ぼんやりの時間』による）

＊らんだ庵……筆者の別荘。

問一　空欄 A に入れる最適なことばを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　音楽　　イ　四季　　ウ　空気　　エ　神話　　オ　宇宙

問二　空欄 B に入る書名を、本文中の漢字から選び、記せ。

問三　傍線部(1)「四顧」の意味として最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　過去を振り返ること　　イ　物思いにふけること　　ウ　自然と一体化すること

エ　まわりを見まわすこと　　オ　自然の音に耳を傾けること

問四　傍線部(2)「満目黄葉の中緑樹を雑ゆ。」という表現の説明として最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　一面の雑木林の緑に、黄葉をはじめた木々が点在している。

イ　一面の木々が黄葉する中で、緑の新芽が芽吹きはじめている。

ウ　あたり一面の樹木が黄葉するなかに、緑の木が混じっている。

エ　あたり一面の常緑樹と、黄葉した楢の木々とが相半ばしている。

オ　黄葉し、落葉した幾千万の木の葉に、何枚かの緑葉が混在している。

問五　空欄 C に入れる最適な漢字を、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　円　　イ　片　　ウ　厘　　エ　握　　オ　陣

問六　空欄 D に入れる最適なことばを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　内的　　イ　外的　　ウ　静的　　エ　動的　　オ　知的

問七　傍線部(3)「カンショウ」にあてる漢字は文脈を考えた場合どれが最もふさわしいか、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　干渉　　イ　感傷　　ウ　鑑賞　　エ　観照　　オ　感賞

問八　二重傍線部(a)「ケシン」を漢字に直し、(b)「先達」の読みをカタカナで記せ。

問九　傍線部(4)「静寂とは、無音の状態をいうのではない」とあるが、筆者の考える「静寂」とは、どういったものなのか、最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　経済活動よりも自然保護を優先させる発想に貫かれた、やすらぎに満ちた夜明け前の静けさ

イ　原初のころから当然のように存在していた、豊かな大自然の深い沈黙のような静けさ

ウ　発生源がどこかということが充分に特定可能な、すこぶる耳に快い音のみが支配する静けさ

エ　自然の音と人工的な音とがうまく調和し、両者が互いに交響し合う神秘的な世界の静けさ

オ　大自然や生きものが発する多様で多彩な音と声とが調和し、黙思、黙想の質を深めてくれる静けさ

問十　傍線部(5)「芭蕉や蕪村の残してくれた句の心」とあるが、両者の句には対照的な部分がある。その説明として最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　芭蕉が大自然を構成する小動物の生の営みに自分の人生を重ねているのに対し、蕪村は自然の摂理をあるがままに受け止めている。

イ　擬人法を駆使し自然と人間が一体化する一瞬を切り取った芭蕉の句に対し、蕪村の句には永遠の時の流れが隠喩として示されている。

ウ　芭蕉が自然と一体化した蟬の激しい鳴き声に逆に静寂を感じているのに対し、蕪村の場合は時雨が楠を濡らす微妙な音に静寂を感知している。

エ　誇張法を用いてダイナミックな自然を詠み込んだ芭蕉に対し、蕪村は初秋の寂しさを象徴する時雨という季語で静的な自然を現前させている。

オ　芭蕉の句は夏の季語である蟬に上昇的な自然を象徴しているのに対し、蕪村のそれは秋の訪れを予感させる時雨に下降的自然を象徴させている。

問十一　傍線部(6)「そのことの恐ろしさに気づかぬことの恐ろしさ」とあるが、それはどのようなことを意味しているのか。その説明として最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　伝統的な「聴く文化」が失われつつあるが、それを失わせているのが、他ならぬ私たち日本人であるということに気づかない恐ろしさ。

イ　一度失ってしまった自然は回復不能であるが、そのことに気がつかずに、相変わらず自然破壊を続けていることに気がつかない恐ろしさ。

ウ　芭蕉や蕪村の句にあるごとく、日本人は「聴く文化」と共に生きてきたが、そうした日本人の感性が鈍りつつあることに気づかない恐ろしさ。

エ　経済至上主義で進んできた戦後の日本のありかたが、日本人の自然観に微妙な変化をもたらしつつあることに気づいていないことの恐ろしさ。

オ　静寂への過剰なこだわりが、大自然の発する多様な音や生きものの声の排除に結びつき、「聴く文化」の伝統を喪失しつつあることに気づかないことの恐ろしさ。

問十二　芭蕉の作品でないものを、次のア～オから一つ選び、記号をマークせよ。

ア　更科紀行　　イ　野ざらし紀行　　ウ　笈の小文　　エ　おらが春　　オ　おくの細道

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

むかし、おきなありけり。常のことにいへりけるは、「ふみをよむは、貧をまねくためなり」とあながちにいはれけり。*(2)螢の火かげ、雪のひかり、(3)隣の壁のこぼれをたのむたぐひ、おほかりけり。みやこに、浪華に、ふみあまた買ひつみて、もたりといふ人も、*こがね千ひらをつひやせし人は、いと稀なりとや。茶器など、もてあそぶ人は、手にすゑて見るばかりの物にも、(5)それらのあたひなるは、(6)いくらも買ひ入れてもちたるをや。(7)此のためし今の世のみにあらず、*源氏ものがたりにいへる、家より外にもとめたる(8)装束どもの打ちあはずかたくなしき姿などをも、はぢなく、おももち声づかひ、うべうべしくもてなしつつ、座につきならびたる作法よりはじめて、見もしらぬさまどもなりし、とかきしは、おほやけにつかうまつる*儒者たちの、まづしきさまを見るに浅ましとていへるなり。

又「田舎よりのぼる書生は国をいづるより、人の世話にはなりうち、写本はぬすむもの、ふみはかり取りにかへさぬもの、とまづおぼえて来るなりけり」とある師のかたられし。

（上田秋成『癖癖談』より）

【注】

*螢の火かげ……　秋成自身の注に「螢をあつめてふみをよみしは、車胤なり、雪の光をたのむは、孫康、となりの家の灯をひきしは、匡衡、いづれも貧人なり」とある。

*こがね千ひら　黄金千枚。

*源氏ものがたりにいへる……　秋成自身の注に「源氏は、をとめの巻なり、貧しきあまり、人のものをかり着したれば、ここかしこたけあはず、見苦しきを、われは何ともなげに、作法ぶりて、居ならびたるが、をかしとなり」とある。

＊儒者たちの……　秋成自身の注に「我が朝学官の窮するよしは、三善清行（きよつら）の、意見封事の第四条に見えたり」とある。三善清行は、平安時代の漢学者で、九一四年に醍醐天皇に「十二箇条の意見封事」という意見書を提示した。

問一　二重傍線部「ふみ」の意味として、最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　文書　　イ　詩書　　ウ　書籍　　エ　書簡　　オ　歌論書

問二　傍線部(1)「あながちに」の意味として、最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　ひたすら熱心に
イ　卑しめた口調で
ウ　無理難題であるかのように
エ　逆説的に
オ　間違って

問三　傍線部(2)「火かげ」の「火」のよみとして、最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　か　　イ　こ　　ウ　ほ　　エ　おも　　オ　ともし

問四　傍線部(3)「隣の壁のこぼれをたのむ」とあるが、具体的には何をたのみにすると言っているのか。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　隣家の協力
イ　隣家の灯火
ウ　隣人の我慢強さ
エ　隣家の窮乏生活
オ　隣人の向上心

問五　傍線部(4)「稀なりとや」の意味として、最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　稀だとのことだ
イ　稀だと言えないだろう
ウ　稀ではないと言っている人がいる
エ　稀なことか、それとも稀でないのか
オ　稀だとしても、いることはいる

問六　傍線部(5)「それら」の指示するものとして最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　おきな
イ　茶　器
ウ　つひやせし人
エ　こがね千ひら
オ　もたりといふ人

問七　傍線部(6)「いくらも買ひ入れてもちたるをや」の解釈として、最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　いくらなんでも大量に買ってもっているわけではないのに
イ　たくさん買ってもっているというのに
ウ　買ってもっている者は一人としていないのではないか
エ　ましてや多くを買ってもっているのは言うまでもない
オ　いくらでも買ってもっていることなどできないのに

問八　傍線部(7)「此のためし」とあるが、「此」の指し示すものは何か。最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　学者の困惑ぶり
イ　学者の世間知らず
ウ　学者の執念
エ　学者の刻苦勉励
オ　学者の貧乏生活

問九　傍線部(8)「装束どもの打ちあはずかたくなしき姿」の意味として、最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　自分の着ているものよりも他人の着ているものを気にしているそぶり
イ　着ているものが自分の身の丈に合わずみっともないさま
ウ　衣裳を借りたことを他人に気づかれないようにしているさま
エ　着ているものが借りものなので大層かしこまっている様子
オ　とりあえずはみっともなくないように着飾っている様子

問十　傍線部(9)「かり取りにかへさぬ」の意味として、最適なものを次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　借り賃を支払おうとしない

イ　返すことができないからはじめから借りない

ウ　もしも取り戻しに行こうと思ったとしても無駄である

エ　借りたままで自分のものとしてしまう

オ　一度くらい取り返しにきたとしても返却などしない

問十一　車胤と孫康の故事から、「螢雪の［　　］」の成語がうまれた。空欄に入る最適の一字を、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　攻　　イ　効　　ウ　光　　エ　巧　　オ　功

問十二　注の中の二重波線部「我が朝」の意味として最適なものを、次のア～オから選び、記号をマークせよ。

ア　朝臣　　イ　朝廷　　ウ　日本　　エ　唐朝　　オ　平安朝